

<原著論文>

青年期における見捨てられ不安尺度開発の試み その1

- 社会構造の変化を重視して -

Development of abandonment anxiety scale in adolescence

齋藤 富由起¹, 吉森 丹衣子², 守谷 賢二³, 吉田 梨乃⁴, 小野 淳⁵

要 旨

社会的ネットワークの希薄化を背景に、過剰な承認欲求(山竹, 1998・2011)などの現代的な課題を反映した青年期心性が注目されている。こうした青年期心性の一つに「見捨てられ不安」(abandonment anxiety)がある。見捨てられ不安は、その概念の成立から精神分析理論の影響が強く、現在の社会的要因を独立変数とする数量的検証に乏しかった。本研究では見捨てられ不安を社会構造の変化に基づく現代的な青年期心性として、「重要で身近な他者(集団)に承認される自信がなく、自身の価値観をありのままに主張すると、重要で身近な他者(集団)から嫌われるのではないかという不安から自己犠牲的な認知・行動を過剰に選択する心理傾向」と定義し、質問紙の開発を試みた。その結果、「承認・注目欲求」と「過剰な自己犠牲」の2因子15項目の「見捨てられ不安尺度」の開発に成功した。

キーワード：見捨てられ不安, 承認欲求, 尺度, 社会構造, 青年期

abandonment anxiety, motive of validation, Scale, Social Structure, adolescence

1. 問題提起と目的

1-1. 見捨てられ不安に関する新しい認識枠組みの登場

周知のように、見捨てられ不安(abandonment anxiety)はMahler(1975)の情緒発達理論を背景に、現代でも境界性パーソナリティ構造を理解するための重要な概念である(McWilliams, 1994; Gabbard & Wilkinson, 2000)。しかし近年の境界性パーソナリティ障害の理論的な枠組みはLinehan(1993)による弁証法的行動療法の生物社会理論の登場に代表されるように大きく変貌しようとしている。

新しい認識枠組みに共通しているのは、無意識仮説に基づく発達理論によって見捨てられ不安などの精神分析的概念を理解するのではなく、そのような心理的特徴を認めつつも(あるいは理論的相違から精神分析的概念の呼称は使用しないが、そのような

認知と行動の存在は認めつつも)、その理解に無意識仮説を適用せず、早期不適応スキーマ(Young, 1983・1987)や社会的学習理論に基づく自己同一性意識障害(Millon, 1981・1987)あるいは生物社会理論(Linehan, 1993)でそれらを把握する傾向である。

本研究では精神分析における見捨てられ不安を概括し、次いで社会構造の変化による新しい見捨てられ不安の操作的定義を提案する。

1-2. 精神分析における見捨てられ不安

Mahlerは乳幼児が母親との未分化な状態から一個の独立した個人として誕生するまでの精神内界プロセスを分離個体化過程と名付け、このプロセスが生後4, 5ヶ月~30, 36ヶ月の間に達成され「正常な自閉段階」, 「正常な共生段階」, 「分離個体化段階」に整理できることを指摘した。さらに分離固体化段階の第3段階である再接近期

1 Fuyuki SAITO	千里金蘭大学 生活科学部 児童学科	受理日：2012年10月31日
2 Taeko YOSHIMORI	公立中学校スクールカウンセラー	
3 Kenji MORIYA	文教大学大学院人間科学研究科 博士後期課程	
4 Rino YOSHIDA	社会福祉法人 聖音会 鎌倉児童ホーム	
5 Atushi ONO	千里金蘭大学 生活科学部 児童学科	

(Rapprochement: 約14~24ヶ月)における幼児の特徴的行動として母親に接近したいという欲求と母親から分離したいという欲求を交互に経験する(両面的傾向の現れ)。通常、この現象は再接近危機と呼ばれる。

Masterson (1976)によれば境界性パーソナリティ構造の中核は「見捨てられ不安」であり、この「見捨てられ不安」は、Mahlerのいう分離個体化段階の再接近期危機の乗り越えの失敗により生じていることを指摘している。Masterson (1976)は境界性パーソナリティ構造のクライアントの母子関係に注目し、母子がともに境界性パーソナリティ構造を有しているケースが多いことを見出した。そしてこのことから母親の未解決な見捨てられ不安が、子どもの正常な分離個体化の発達を阻害するとしている。

母親にとって幼児の分離は、母親が見捨てられることを意味する。そこで母親は自分自身の「見捨てられ不安」を防衛し、幼児の分離行動を阻止するために、幼児が分離行動を行った際には感情を供給せず、自分自身に対して依存し続けること促すために、自分自身に依存するような行動を示した時には愛情を供給する。

幼児は自分自身の分離と自律への欲求と、自律に必要な母親からの愛情供給の喪失との間で葛藤状態に陥った結果、幼児の中に「重要な存在(母親)が自分から去ってしまうのではないかという不安」、すなわち「見捨てられ不安」が生じる。しかし幼児は「見捨てられ不安」を直視でないため、否認(denial)や分裂(splitting)という境界性パーソナリティ構造に基づく防衛機制で「見捨てられ不安」を処理する。さらに、Masterson (1976)は「見捨てられ不安」を、抑うつ、怒りと憤怒、恐れ、罪責感、受動性と孤立無援感、空しさと空虚感の6成分から成立すると述べている。

以上のように「見捨てられ不安」の概念は伝統的に精神分析理論の範疇にあり、最終的には自我心理学的対象関係論を確立したKernbergによる境界性パーソナリティ構造理論へと行きつく。DSMにも影響を与えたKernberg (1993)の理論は境界性パーソナリティの理解を大きく前進させたものとして現在でも評価されている。

1-3. 見捨てられ不安研究の新たな傾向 —連続説による質問紙研究を重視して—

精神分析理論がKernberg (1993)の境界性パーソナリティ構造理論を中核に発展する一方で、新しい研究の動向も見られている。中でも見捨てられ不安の連続説に基づく比較的健康的な群への概念の拡張は注目される。

伝統的な見捨てられ不安は病理的な要素が強調され、健康群とは一線を画してきた。しかし、うつ病の軽症化や自傷行為の浸透を受け、境界性パーソナリティ障害や見捨てられ不安の心性も比較的健康的な群に確認できるのではないかと仮説から生じたアナログ研究の方向性である。

比較的健康的な群への研究は事例研究から量的な質問紙による因子構造の検討へと見捨てられ不安研究を発展させた。以下、加倉井他(2005)を参考に、比較的健康的な群を対象に作成された質問紙研究を紹介する。

①Personality Assessment Inventory

Personality Assessment Inventory (以下、PAI)はMoreyによって1987年から1993年にかけて開発されたパーソナリティ評価尺度である。いくつかの異なった臨床領域に渡って心理的機能を評価するために作成された尺度である(Stewart & Lucente, 1997)。海外の境界性パーソナリティ研究においては、PAIが使用される頻度は非常に高く、十分な信頼性と妥当性を備えている。

PAI (Morey, 1991)は、(1)4つの妥当性尺度、(2)DSMに対応した病理学的主要なカテゴリーを網羅している11個の臨床尺度、(3)治療とケースマネジメントに関係した構成概念を測定する5つの治療尺度、(4)2つの対人関係尺度という4つの尺度セットで構成されている。この中で、BPDに関連する尺度は、(3)の11の臨床尺度の中の境界例特徴(borderline feature)を示すBOR尺度である。BOR尺度は境界性水準の機能特性である不安定で変動する対人関係、衝動性、情緒的な不安定さ、そして制御不能の怒りに焦点を当てた項目からなる。

下位尺度は、BOR-A(情緒的不安定さ)、BOR-I(アイデンティティに関する問題)、BOR-N(否定的な人間関係)、BOR-S(自傷行為)の4因子で構成されている。

BOR-Aでは、感情的反応と急激な気分の変化、そして乏しい情動制御に焦点が置かれており、

BOR-Iは人生における主な問題についての不確実性、空虚感、達成感の不足と目的の欠如に焦点が置かれている。また、BOR-Nにおいては、アンビバレントな経験と搾取されたと感じたり、裏切られたと感じたりするような激しい人間関係に焦点が当てられ、BOR-Sでは否定的な結果をもたらす可能性の高い領域での衝動性に焦点をおいている。

BOR尺度の高得点から境界性パーソナリティ障害の診断は出来ないが、下位尺度の3つ、もしくは4つが全て70点以上の高さの時、BPDの診断が下される確率が増加することが統計的に明らかにされている (Morey, 1991)。

②Personality Assessment Screener

Personality Assessment Screener (以下、PAS) は、PAI開発後に、PAIのスクリーニング版として開発されている (Morey, 1997)。PASはPAIの22項目の下位セットであり、広範囲に渡る異なる臨床問題 (clinical issues) を短時間でスクリーニングすることが可能である。PASで使用される項目は、(1) 否定的情緒 (Negative Affect; NA)、(2) 行動化 (Acting-Out; AO)、(3) 健康問題 (Health Problems; HP)、(4) 精神病型 (Psychotic Features; PF)、(5) 社会的ひきこもり (Social Withdrawal; SW)、(6) 敵意制御 (Hostile Control; HC)、(7) 自殺念慮 (Suicidal Thinking; ST)、(8) 疎外感 (Alienation; AN)、(9) アルコール問題 (Alcohol Problems; AP)、(10) 怒りの制御 (Anger Control; AC) といった臨床的領域を網羅している。

③ミロン臨床多軸目録境界性スケール17項目短縮版

ミロン臨床多軸目録境界性スケール17項目短縮版は、井沢ら (1995) によって、標準化されたミロン臨床多軸目録 (Millon, 1987: Millon Clinical Multiaxial Inventory; MMIC II) の日本語版である。調査協力者は初診が境界性パーソナリティ障害またはその近縁疾患と診断した35名 (男性17名: 女性18名; 平均年齢 28.6 ± 6.4 歳) である。標準化における妥当性の外的基準としては国際パーソナリティ障害診断面接による半構造化面接の結果に基づいており、任意のカットオフポイントによる妥当性の検討から高い収束的弁別性が得られている。

因子分析の結果は6因子構造となっており、(1) 対人関係・感情の不安定性、(2) 反社会性-罪悪感、(3) 衝動性、(4) 両親との葛藤と逃避・無

謀傾向の因子、(5) 自己・他者に対する攻撃性、(6) 不眠と緊張が抽出されている。

井沢 (1997) による追試では4因子構造であり、(1) 衝動性、(2) 行動への罪悪感、(3) 怒りの持続と不眠、(4) 対人的な自己中心性が抽出されている。信頼性は α 係数により測定されており、平均0.74であった (井沢, 1995)。また追試 (井沢, 1997) では平均0.79であった。なお井沢 (2005) は後に独自のボーダーラインスキーマ尺度を開発している。

④日本版ボーダーライン・スケール

日本版ボーダーライン・スケールは、BPDの内的メカニズムを検討する目的でConte, Plutchik, Karasu & Jerretによって作成された自己報告式ボーダーライン・スケールを、町沢 (1990) が日本語版に標準化した50項目 (2件法) からなる尺度である。サンプル数は境界性パーソナリティ障害と診断された44名 (男性9名: 女性35名; 平均年齢 24.7 歳 ± 6.3 歳) である。妥当性の外的基準はDSM-III-Rによる厳密な診断に基づいている。

町沢 (1990) はサンプル数の増加にともない因子分析を行い、22項目により、6因子構造を抽出した。各因子は(1) 絶望感および無力感、(2) 自己同一性の障害と精神病的傾向、(3) 見捨てられ感、(4) 孤独感と低い自尊心、(5) 精神病的傾向、(6) 達成動機の低下、となっている。更にクラスター分析を行った結果、BPDが「自己脆弱性有意型」(統合失調症圏寄り) と「抑うつ気分有意性型」(感情病寄り) に分類されることを主張している。

信頼性については、DSM-III-R、DSM-IVの診断基準との整合性が議論されている。日本版ボーダーライン・スケール (町沢, 1990) は我が国の境界性人格の内的機序を提唱した点で臨床的に有用な尺度であるが、統計的観点からは、50項目の因子分析においてサンプル数が少なく、信頼性係数と妥当性係数が得られていない点が指摘できる。

⑤「見捨てられ抑うつ」尺度

小川・佐々木 (1994) は、現代社会は価値観が多様で一貫性がなく、対人関係においても安定した対象と関わる機会が少ないものと考えた。そのため、境界性パーソナリティ障害だけではなく、現代の若者で「見捨てられ抑うつ」といえる心理状態や対人関係の問題を抱えやすくなっていると指摘し、「見捨てられ抑うつ」尺度の作成を試みた。

大学生128名 (男性56名: 女性72名; 平均年齢19

歳)に質問項目28項目に因子分析を行った結果、「自己意識の曖昧さ」、「絶望感・無力感」、「疎外感」、「対人不安ないし不信感」、「孤独感」の5因子が抽出された。

さらに佐々木(1996・1997・1998)は追試を重ね、42項目の質問紙を作成して調査を行った。その結果、質問紙は2因子構造となり、第1因子が対人恐怖心性に近い内容と判断されたため、残った30項目を対象に再度因子分析を実施し、「周囲との疎外感」、「無力感」「親密さへの不信」の3因子が抽出された。信頼性を示す α 係数の平均は0.94であった。

⑥見捨てられ不安尺度

吉森・守谷・社浦・斎藤(2008)により開発された尺度であり、「見捨てられ回避」と「否定的関係認知」の2因子24項目の信頼性(α 係数=.881)を備えた尺度である(山内他2008;森他,2008;池田他,2008;守谷他,2008;斎藤他,2008)。大学生を対象にした境界性パーソナリティ特性との関係では有意な相関が見られ、特に見捨てられ不安尺度の「見捨てられ回避因子」と境界性パーソナリティ特性尺度における「保護欲求制御不全」との関連性が高いことが示された(古澤他,2008)。

小川ら(1994)の尺度の構成人数が少ないことと、理論的前提をマスターソンに依拠して作成されたこの尺度の特徴は、比較的健全群においても見捨てられ不安尺度が成立した点である。他方、項目の内容がやや病理性が高い点と理論的に精神分析理論に偏っている点が指摘できる。

以上のように加倉井他(2005)に依拠して既存の見捨てられ不安に関連する量的研究を整理したが、今後もこの種の質問紙は開発されることだろう。例えば最も単純にはスキーマ療法のYoung(1987)やYoung & Swift(1988)の7つの早期不適応スキーマやBeck & Freeman(1979)の「3つの鍵」(「この世界は悪意の満ちている」「私は無力で傷つきやすい」「私は生まれつき嫌われ者だ」)から項目を集め、大学生を対象に質問紙調査を行うなどは容易に考えられる方向性である。

すでに境界性パーソナリティ障害の治療効果で推奨されている弁証法的行動療法などの既成の治療法と比較し、さらにスキーマ療法や認知療法の治療効果に関するエビデンスに基づき、その研究上の意義は決定されていくのだろう。そして、この種の質問紙研究は今後も形を変えて様々に継続するだろう。

しかし、より重要なことは「なぜ今、境界性パーソナリティ障害や境界性パーソナリティ特性あるいは境界性パーソナリティ傾向が注目されているのか(臨床報告が増えてきているのか)」という社会的背景を実証的に説明することである。Linehan(1993)が指摘するように境界性パーソナリティ障害そのものは生物学的因子の関与も否定できない。このことを重視すればアナログ研究の連続説は成立しない。他方、同じくLinehan(1993)が理論化しているように、境界性パーソナリティ障害には社会的要因も影響を及ぼしている。ある時代状況が社会的要因となり境界性パーソナリティ障害に類似した心性を形成しやすくなるとの仮説の内容を具体的に説明することにより、今後のアナログ研究はいっそう説得力を持つことだろう。現在のアナログ研究にはこうした社会状況論の視点が欠けている。境界性パーソナリティ傾向を生じさせる社会要因の具体的な検証が求められる。

1-4. 問題提起

以上の6尺度は直接的または間接的に見捨てられ不安を扱っており、その成立過程に解釈の余地はあるにしても、質問項目の内容に大きな相違はない。つまり、それぞれの尺度における見捨てられ不安関連項目は「重要な他者が私から去ってしまうかもしれないという不安」という点で共通しており、「見捨てられ不安」と呼ばれる認知と行動が(特に青年期に)量的に確認できることは事実である。

他方、見捨てられ不安の量的研究は比較的重篤な境界性パーソナリティ障害が前提にあり、そのアナログ研究としての質問紙開発が中心となっていることも理解できる。つまり、見捨てられ不安のような認知や行動は量的にも確認できるが、その質問項目の選定や理論上の目的には精神分析理論の影響が残されている。

しかし、小川・佐々木(1994)が述べるように、現代は価値が多様化しており、対人関係が不安定であることも事実である。山竹(1998・2011)は近代的な価値観が多様化した結果、社会的抑圧は感じられず、青年層は比較的自由に行動することができるが、何をすれば社会に承認されるのか、自分の行為に価値があるのかを承認する参照枠が不透明になり、身近な人間の承認を求める強い承認欲求と承認不安が特徴と指摘している。

また本田(2005・2007a・2007b・2009)は家族

－教育－仕事の3領域の関係性に齟齬が生じ、ハイパーメリトクラシー（高い業績主義）が求められる現代において青年期に自己責任化と自己否定、自己排除の心性が生じていると指摘している。

こうした社会構造の変化に基づく承認不安や自己排除は、主体性を抑制して参照枠である親密圏にあわせる行動と、親密圏から離れられない構造を生じさせる。こうして身近な仲間集団からの評価を過剰に意識し、（去られるかどうかというよりも）、「空気が読めない」という視点から嫌われて仲間集団から疎外されたり、身近な周囲から変に思われたりしないかという視点が青年層に生じる。

こうした背景を考えあわせると、現代における見捨てられ不安は、精神分析的な境界性パーソナリティ構造理論が前提としているような家族関係や対象関係論の両価の心性に基づく以上に、恋人などの重要な対者や他者集団（仲間グループ）から認められる自信に乏しくて過剰に気を引こうとしたり、過剰に「良い人」を演じることによって、一見楽しく振舞っているようにみえながら、自分自身を犠牲にしているような認知・行動パターンを意味しているとの仮説が提唱できる。そこに境界性パーソナリティ障害で指摘された「見捨てられないための過剰な振る舞い」や「主体性の希薄さ」などが重なっているのだろう。換言すると、親密圏から排除されないための過剰な不安である。

そこで本研究では精神分析的概念から離れ、上記の観点から見捨てられ不安を社会学および社会心理学的視点（e. g., 山竹2011；本田）の承認欲求説や自己否定・自己排除説に依拠し、社会構造の変化に基づく現代的な青年期心性として、「重要で身近な他者（集団）に承認される自信がなく、自身の価値観をありのままに主張すると、重要で身近な他者（集団）から嫌われるのではないかという不安から自己犠牲的な認知・行動を過剰に選択する心理傾向」と操作的に定義する。

1-5. 目的

本研究の目的は青年期の見捨てられ不安を「社会構造の変化に基づく現代的な青年期心性として、重要で身近な他者（集団）かに認められる自信がなく、重要で身近な他者（集団）から嫌われるのではないかという不安から過剰に自己犠牲的な認知・行動を選択する現代の青年期に特徴的な心理傾向」と定義し、量的検討によって因子構造を確認することであ

る。

2. 青年期における見捨てられ不安尺度の作成

2-1. 方法

調査協力者：私立大学の大学生411人（女子251人，男子160人，平均年齢20歳±1.4）。研究に先立ち、この分野に詳しい臨床心理士（41名）にインタビュー調査を行うとともに、大学生（231名）に対して、先の定義に基づき、「どういふときに見捨てられ不安を感じるか」のアンケートを行い、臨床心理士6名によるKJ法によりそれらをまとめ状況を抽出した。抽出された項目は20項目であった。項目は「まったく経験がない」から「よくやっている」までの5件法により尋ねられた。

また基準関連妥当性として、「自尊感情尺度」（山本他，1982）および「見捨てられ不安尺度」（吉森，2007）が使用された。

3. 結果

20項目に対して、天井効果と床効果を検討した。その結果、問7，問8，問14に床効果が見られたので分析の対象外とした。

残った17項目に対して因子分析（主因法・プロマックス法）を行なった。スクリープロットから2因子解が選択された。スクリープロットを図1に示す。

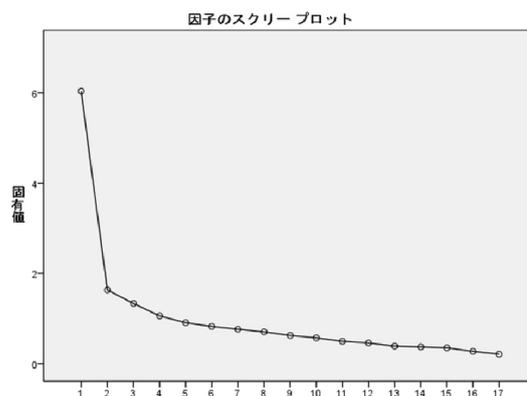


図1. スクリープロット

分析の結果、2因子・15項目の「青年期における見捨てられ不安尺度」が見出された。信頼性を示す α 係数は第一因子で.813，第二因子で.801，全体として.856であった（累積寄与率57%）。基準関連妥当

性として自尊心尺度とは負の相関 ($r = -.397$) が、見捨てられ不安尺度とは正の相関 ($r = .601$) が見出された。したがって本尺度は十分な信頼性と妥当性を備えているといえる。以上の結果を表1、表2に示す。

表1. 見捨てられ不安尺度の結果

	I	II
自分にとって特別な存在であることを大切な人にアピールする。	.761	-.042
気がかりなことがあると、誰かに気づいて欲しくてブログやメールに自分の気持ちを書いて公表する。	.765	-.043
気持ちが不安になると、友だちに自分の気持ちを大きめに話し、相談ののってもらおう。	.754	-.077
メールの返信が来ないと不安になり、何度も相手に問い合わせをする。	.535	.096
自分に注目してほしいから、わざと気を引くような行動をする。	.453	.240
別の友人と先約があるのに、目の前の友人に嫌われたくないため、目の前の友人の誘いを優先してしまう。	.449	-.034
自分の振る舞いが友人から変に思われないか、気にしている。	.409	.254
相手の気を引くために、何度も電話をして着信履歴を残す。	.400	-.049
周りにどう思われているかを気にして、本当の自分を出せずにいる。	-.187	.845
自分の嫌いな人にも嫌われたくないと思う。	.009	.613
友人が不機嫌そうなときは、自分が原因ではないかと不安になる。	-.059	.601
周りに良く思われたいため「いい人」を演じてしまう。	.049	.589
自分が誘われていない集まりがあると嫌われているのではないかと不安になる。	.164	.518
本当は好きな友人でも、周囲がその友人の悪口を言っていたら一緒になって悪口を言ってしまう。	.012	.424
自分のスケジュールを犠牲にしても、他人からの新しい依頼を断れない。	.214	.362
因子間相関	I	II
	-	0.576
	II	-

表2. 妥当性の結果

妥当性	
自尊感情尺度	-.397**
見捨てられ不安尺度	.601**

(** $p < .01$)

第一因子は注目や承認を得るための過剰な行動を示す項目が多いことから、「注目・承認欲求」と命名された。第二因子は身近な友人たちから嫌われないための過剰な振る舞いを示す項目が多いことから、「過剰な自己犠牲」と命名された。

4. 考察

4-1. 尺度の作成について

見捨てられ不安を測定する20項目を取捨し、因子分析(プロマックス回転)をおこなった結果、信頼性と妥当性を持つ2因子15項目の尺度が作成された(累積寄与率57%)。妥当性を示す自尊感情尺度と見捨てられ不安尺度との妥当性係数も有意な結果で

あった。したがって社会構造の変化を重視した青年期における見捨てられ不安尺度は作成されたといえる。

4-2. 本研究の限界と今後の展望

本研究の特徴は、精神分析的理論から離れ、社会構造の変化から説明される見捨てられ不安尺度を作成することであった。その結果、質問紙は完成したが、このことは精神分析的理論に基づく「見捨てられ不安」を否定するものではない。妥当性係数から理解できるように、中程度の相関は認められており、両尺度は健康度において連続しているとも考えられる。病理法から作成された精神分析的理論と社会構造の変化から提案された「見捨てられ不安」の相違だろう。本尺度は臨床的なデータを保証するものではなく、あくまでも青年期の特徴的な心理特性として見捨てられ不安を把握しており、臨床データとの関連性は今後の課題である。

他方、換言すれば中程度以上の共通性はなく、連続性は同質を意味しない。つまり、精神分析的な見捨てられ不安とは異なる次元の背景を持つ青年期心性として「見捨てられ不安」の次元が出現していることを示している。その本質は親密圏から排除されないための不安かもしれない。今後、最も検証しなければならない論点は、この新しい見捨てられ不安を直接に導いている社会的要因の具体的な検討と考えられる。

本研究では、山竹(1998・2011)や本田(2005・2007a・2007b・2009)の学説に依拠したものの、見捨てられ不安が特徴となる社会構造の変化をどのような社会理論で説明するかという点については議論の余地が残されている。心理学的理論からはLinehan(1993)による無効化する環境論、経済学の観点からは「定常型社会論」(広井, 2001)などが社会行動の変化とそれに伴う心理特性の変化を指摘しているが、本研究の結果との整合性は今後の課題である。

本尺度の項目には「ブログ」や「メール」などの概念が登場している。この項目は作成段階で調査者の中で「あまりにも青年期に限定された項目ではないか」あるいは「ブログはそこまで普及しているだろうか」との観点から議論があった。しかし青年期の臨床実践をしている立場からは周囲が読んでいることを知りつつ、また心配することを意識しつつ、ネガティブな気持ちをブログに書くという行為は浸

透しているように思われる。追試によりこの項目の検証を行いたい。

本研究の結果は、一見自由に振る舞っているように見える青年層に、身近なネットワークから見放されたくないがゆえに自分の欲求や主体性を抑制している心性が働いていることを示唆している。つまり、現代における見捨てられ不安の特性は、親密なネットワークからの排除不安である。このことは現代の青年層に指定される関係の希薄さ（松下他, 2007）と表裏だろう。青年層へのインタビュー調査を試み、この現代的な青年期心性についての詳細は把握が求められる。

引用文献

- 1) Beck, A. T & Freeman, A 1979 Cognitive therapy of personality disorder. Guilford Press./ベック&フリーマン 1997 人格障害の認知療法 岩崎学術出版.
- 2) Gabbard, G. O. & Wilkinson, S. M 2000 Management of Countertransference with Borderline Patients. Jason ARNISON Inc.
- 3) 本田由紀 2005 多元化する能力と日本社会ハイパー・メリトクラシー化のなかで NTT出版
- 4) 本田由紀 2007a 若者の労働と生活世界－彼らはどんな現実を生きているか 大月書店
- 5) 本田由紀 2007b 教育政策の現状に対して教育学は何をなしうるか 日本教育学会大会研究発表要項 66, 312-313.
- 6) 本田由紀 2009 教育経験と就労行動・就労意識 教育学研究, 76, 67-69.
- 7) 古澤知佳・井手絵美・片桐智佳・曾根美樹・若林くもる・守谷賢二・斎藤富由起 2008 ボーダーライン特性と見捨てられ不安との関連性－見捨てられ不安研究 その6－ 日本カウンセリング学会第41回大会発表論文集257頁.
- 8) 池田彩子・守谷賢二・斎藤富由起・吉森丹衣子・山内早苗・森裕子 2008 見捨てられ不安と愛着行動の関連－見捨てられ不安研究 その3－ 日本カウンセリング学会第41回大会発表論文集254頁.
- 9) 井沢功一郎・大野裕・小此木啓吾 1995 ミロン式臨床多軸目録－Ⅱ境界性スケール短縮版の構成とその妥当性・信頼性の検討－ 季刊精神科診断学, 6, 473-483.
- 10) 井沢功一郎 2005 ボーダーライン・スキーマ質問紙 (BSQ) の作成 心理臨床学研究, 23, 273-282.
- 11) 加倉井華譽子・斎藤富由起・守谷賢二・末武康弘 2005 境界性人格への定量的アプローチの課題と展望 法政大学大学院人間社会研究科臨床心理相談室報告紀要, 17-30.
- 12) Kernberg, Otto F., 1993 *Severe personality disorders: psychotherapeutic strategies*. Yale University Press.
- 13) Linehan, M. M 1993 Cognitive behavior treatment of borderline personality disorder. Guilford Press, New York.
- 14) 町沢静夫 1990 ボーダーラインの心の病理－自己不確実性に悩む人々－ 創元社
- 15) Mahler, M. S 1975 The psychological birth of the human infant. Basic Books.
- 16) 松下姫歌・吉田美悠紀 2007 現代青年の友人関係における希薄さの質的側面 広島大学大学院教育学研究科紀要, 161-169.
- 17) Masterson, J. 1976 Psychotherapy of the borderline adult: A developmental approach. New York: Brunner.
- 18) McWilliams, N., 1994 *Psychoanalytic Diagnosis; Understanding Personality Structure in the Clinical Process*. Guilford Press.
- 19) Millon, T. 1981 Disorders of personality: DSM-III, AxisII. New York: Wiley.
- 20) Millon, T. 1987 Millon Clinical Multi-Axial Inventory. Minneapolis; National Computer System.
- 21) Morey, L. C 1991 Personality assessment inventory. Psychological Assessment Resources, Inc.
- 22) Morey, L. C 1997 PERSONALITY ASSESSMENT SCREENER –Score Report–. Psychological Assessment Resources, Inc.
- 23) 森裕子・池田彩子・守谷賢二・斎藤富由起・吉森丹衣子・山内早苗 2008 見捨てられ不安尺度における妥当性の測定－見捨てられ不安研究 その2－ 日本カウンセリング学会第41回大会発表論文集253頁.
- 24) 守谷賢二・斎藤富由起・吉森丹衣子・山内早苗・森裕子・池田彩子 2008 見捨てられ不安と自己愛性パーソナリティおよびストレスとの

- 関係-見捨てられ不安研究 その4- 日本カウンセリング学会第41回大会発表論文集255頁.
- 25) 小川俊樹 佐々木裕子 1994 「見捨てられ抑うつ」尺度の作成とその検討 筑波大学心理学研究, 16, 243-254.
- 26) 斎藤富由起・吉森丹衣子・山内早苗・森祐子・池田彩子・守谷賢二 2008 青年期版無効か体験尺度の再検討-見捨てられ不安研究 その5- 日本カウンセリング学会第41回大会発表論文集256頁.
- 27) 佐々木裕子 1996 「見捨てられ抑うつ」尺度に関する研究Ⅱ-尺度作成の再検討-日本教育心理学会総会発表論文集, 38, 224.
- 28) 佐々木裕子 1997 「見捨てられ抑うつ」尺度に関する研究Ⅲ 日本教育心理学会総会発表論文集, 39, 220
- 29) 佐々木裕子 1998 「見すてられ抑うつ」尺度の再検討 福岡教育大学紀要, 教職科編, 47, 163-168
- 30) 山本真理子・松井豊・山城由紀子 1982 認知された自己の側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 31) 山竹信二 1998 自由と主体性を求めて 暁烏敏賞事務局.
- 32) 山竹信二 2011 「認められたい」の正体-承認不安の時代- 講談社現代新書.
- 33) 吉森丹衣子・守谷賢二・杜浦竜太・斎藤富由起 2008 見捨てられ不安尺度作成の試み 日本心理学会第72回大会発表論文集 410頁.
- 34) Young, J 1987 Schema-focused cognitive therapy for personality disorders. Unpublished manuscript, Center for Cognitive Therapy, New York.
- 35) Young, J & Swift, W 1988 Schema-focused cognitive therapy for personality disorders: Part I. International Cognitive Therapy Newsletter, 4(5), 13-14.